【2019　第 20 回セミナー報告】

演習レポート

東京六大学学生における 2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会のボランティア活動の影響：探索的コホート研究

報告者　河原　賢二

グループ名：お寿司が食べたい

メンバー：	若田部　舜	法政大学大学院	（発表者）
	後藤　里織	東海大学大学院	（発表者）
	金村　祐美子	武庫川大学大学院	（質疑応答）
	河原　賢二	明治安田厚生事業団	（報告者）
	王　棟	早稲田大学大学院	（書記）
	長阪　裕子	早稲田大学大学院	（書記）

【背景・目的】

2020 年東京オリンピック開催に向けて文部科学省は「社会に影響をもたらす有形・無形，計画的，偶発的な幅広いレガシー」を残せるよう取り組みを進めている。その中で，スポーツ実施率向上のための行動基本計画において，「スポーツボランティア（ささえる）参加促進に向けた取組みを行う」ことを掲げており，東京オリンピック・パラリンピックに向けて 8 万人以上のボランティアを募集している。

これまで，ボランティアに参加した人を対象とした研究としては，参加動機及び満足度（松村ら，2013），継続要因（桜井，2005），を検討したものや，ボランティアに参加した者のストレス対処力が一時的に向上したという報告がある（和，2018）。しかしながら，いずれも横断的に調査したもので，ボランティアに参加したことがその後の生活に影響を及ぼすかを縦断的に検討した研究は国内外で見当たらない。そこで本研究では，オリンピックレガシーを発信する資料として，2020 年東京オリンピック・パラリンピックのボランティアに参加した人のその後のストレス対処力の変化について，大学生の追跡研究によって検討することを目的とした。

【方法】

1) 研究デザイン

探索的前向きコホート研究

2) 対象者

（募集時）東京六大学（以下の 6 大学）に在籍する 1 年生　約 36,000 名

東京大学 3,070 名，早稲田大学 8,705 名，慶應義塾大学 6,396 名，明治大学 7,449 名，立教大学 4,518 名，法政大学 6,441 名（2019 年度入学者）

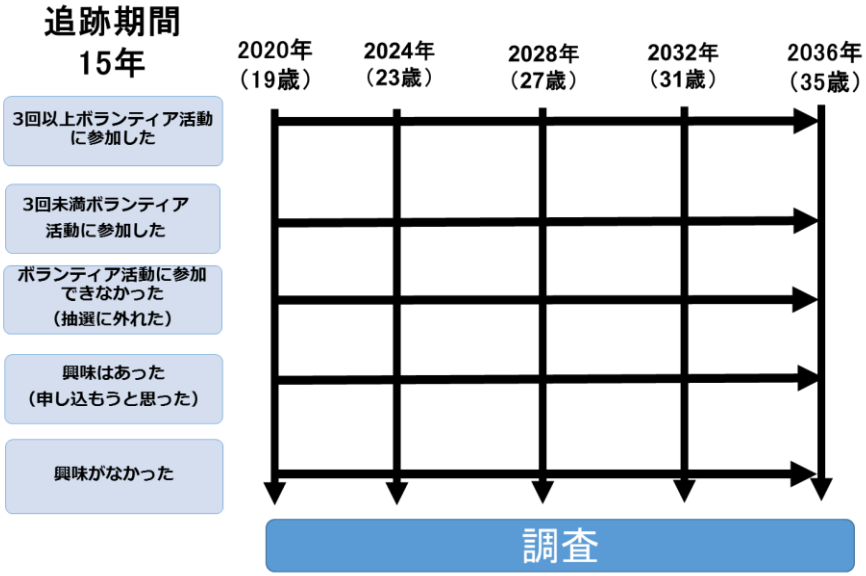
・参加者の除外基準：なし

・募集期間：2019 年 4 月～8 月
（ボランティア申込 2018 年 12 月 21 日締切，2019 年 9 月マッチング発表）

・リクルート：各大学の協力の下，全対象者に本研究の目的を説明し，研究参加の同意を得た 2000 名

・群分け：ボランティアの参加申込みをし，ボランティア活動に 3 回以上参加した者（参加）
ボランティアの参加申込みをし，3 回未満活動に参加した者（中断）
ボランティアの参加申込みをしたが，抽選に外れた者（非参加）
ボランティアの参加申込みを考えたが，申し込まなかった者（熟考）
ボランティアの参加申込みを考えなかった者（前熟考）

3) 研究のイメージ



4) 調査項目

・ 主要アウトカム
ストレス対処力（首尾一貫感覚尺度日本語版；SOC）
・ 副次的アウトカム
世帯収入，収入の満足度，就職状況
・ 調整変数
性別，大学，学部，年齢，取得単位数，部活動への加入の有無，親の収入，居住形態

5) 追跡期間

15 年

6) 統計解析

繰り返しのある二要因共分散分析

目的変数：ストレス対処力（Sense of coherence; SOC)得点（4 年ごとの調査におけるベースラインからの経年変化）

説明変数：ボランティアの参加状況（5 群）

調整変数：性別，大学，学部，年齢，取得単位数，部活動への加入の有無，親の収入，居住形態

7) サンプルサイズ

効果量：ボランティアに参加することでその後の SOC 得点が参加しない群よりも 2 点高くなると想定

標準偏差：3.9 点（辻ら，2017 の大学生を対象とした研究より）

有意水準（両側）：0.05

検出力：0.80

脱落者：20%

1 群 250 名，合計 1,000 名

【倫理的配慮】

研究実施者所属の倫理審査委員会の承認を得たうえで実施する。参加者には研究の趣旨を書面で説明し，同意が得られた者のみを対象者とする。

【期待される効果・意義】

・ オリンピックレガシーとして，東京 2020 の成果を世界に発信することができる。

・ ボランティアに参加することの意義を示すことで社会のニーズにこたえることができる。

【研究予算】

概要	単価(円)	数量	合計
① 備品購入費			**450,000**
パソコン	200,000	2 台	400,000
消耗品	50,000	一式	50,000
② 旅費・交通費			**1,000,000**
学会発表(国際学会)1 回	400,000	2 人	800,000
会議　5 回	40,000	5 回	200,000
③ 印刷製本費			**20,000**
案内(不達用)	20	1,000 人	20,000
④ 通信運搬費			**222,000**
依頼(不達用)	140	1,000 人	140,000
返信(不達用)	82	1,000 人	82,000
⑤ 委託費			**5,000,000**
WEB 調査依頼費(5 回)	1,000,000	5 回	5,000,000
⑥ 会議開催経費	5,000	5 回	**25,000**
⑦ 総計(①+②+③+④+⑤+⑥)			**6,699,000**

【引用文献】

・ 松村浩貴他．第 1 回神戸マラソンのボランティア活動に関する研究：動機，期待， 満足度に着目して．人文論集．2013; 48,55-69.
・ 桜井政成．ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異：ノンプロフィット・レビュー．2005; 5(2)103-113.
・ 和秀俊．大学生のメンタルヘルスにおけるボランティア活動の可能性：田園調布大学紀要．2018; 13,115-131.

【質疑応答の記録】

➢ 調査期間が長いので，脱落者がいたら教えてほしい。
⇒脱落者が出ないよう，ベースライン時に研究の趣旨をしっかりと説明を行う。各大学と連携を図って追跡不能がないように努める。

➢ 東京の六大学に限定した理由は？というのも，色々な対象者にした方が良いと思う。
⇒大学間の学力の影響を考慮するため，東京六大学の学生のみを対象とした。

➢ 室内種目のボランティアは満足するが，外種目のボランティアは満足しないのでは？暑さなどで，ボランティア中にストレスがたまるのではないか。
⇒今回の研究では，ボランティアに対する満足度ではなく，ボランティアの経験がその後の人生への影響について検討することを目的とした。暑さなどでストレスになるかもしれないが，そのような経験がのちにストレス対処力の向上に期待できる可能性もある。

➢ なぜストレス対処をプライマリアウトカムにしたのか。
⇒メンタルヘルスなどの健康問題に対し，ストレスに対応する力が若者に必要と感じ，オリンピックのボランティアの経験によって様々な困難を乗り越える力が身に着くと思ったので，今回はストレス対処力をプライマリアウトカムとした。

➢ サンプルサイズの計算はどのようにして算出したか。2 点良くなることの良さはなにか。
⇒大学生の追跡調査でスポーツサークルに所属する学生は所属しない学生よりも SOC 得点が約 2 点高いという先行研究を参考にしたが，SOC 得点が何点高いと意味をなすか十分に議論することができなかった。

➢ 2～3 週間のボランティアがなぜ一生に影響を及ぼすと考えたのか。
⇒社会に出る前の段階にオリンピックという大きなイベントに関わることが学生にとって大きな意味をなすものと考えた。

➢ ボランティアに参加しなかった人を対象にしなかった理由は何か。テレビを見ることでも変わるのではないか。
⇒ボランティアに参加しなかった人も対象としている。

【感想】

◆ 今回初めて本セミナーに参加させていただき，とても貴重な経験をさせていただきました。私は，疫学的な研究を行っているわけではありませんが，今回の講義で学んだ内容は，他領域の研究においても非常に重要になるものだと感じました。今回の講義でご説明いただいた内容を復習して，自分の武器にしていきたいと思います。私の人見知りな性格のせいで，多くの方とコミュニケーションが取れなかったことを今は後悔しております。今後またお目にかかることがございましたらその時はしっかりとお話できれば幸いです。今回のセミナーを企画・運営して下さった先生方，誠にありがとうございました。

（若田部　舜）

◆ セミナーに初めて参加させていただき，三日間を通して様々な手法や考え方があることを知り今後に繋がるとても貴重な経験をさせていただきました。修士論文を作成していくにあたり講義で学んだ新しい知識を活用しながら日々頑張っていきたいと思います。また，セミナーを通して多くの方とお会いすることができたくさんの刺激をいただきました。将来に向かってより一層気を引き締めて突き進んでいきたいと思います。指導してくださった先生方，企画•運営に携わっていただいた先生方，三日間ありがとうございました。

（後藤　里織）

◆ 初めての参加でしたが，とても充実した 3 日間でした。グループワークでは，お互いにアイディアや意見を出し合い，ディスカッションができたことは，非常に貴重な経験だったと思います。運動疫学だけでなく，日本語もとても勉強になりました。今後，活かしていけるよう，しっかりと復習して自分のものにしたいと思います。講師の先生方，グループの皆様，ありがとうございました。（王　棟）

◆ 私は自身の競技経験を社会へ還元したいとの思いから「食育」活動に取り組んでおり，その為にも遅ればせながら運動疫学の勉強を始めました。私自身が経験した競技生活の中で，様々な競技で活躍するアスリート達のコンディショニング方法を見聞きしていると，それぞれに合ったメソッドがあることを知りました。しかしそれは一般的に必要とされる健康作りに役立つ方法とはかけ離れているものもあり，表現方法を間違えると危険な情報発信となることもあります。

　このセミナー合宿に参加させていただくには勉強が足りず不安もありましたが，この 3 日間を通じて「明らかにしたいこと」に対する手法，注意すべきこと，疫学の歴史など，分かりやすく教えていただいた結果，上述の課題解決の糸口が見つかり，ご指導頂いた先生方に感謝しています。そしてチームに与えられた課題では，自分の思い込みの危険性や，重要性を伝えるために細かな準備が必要であるということなど，多くのことを学ばせていただくことができました。また，ルームメイトの方々とはとても楽しい時間を通じて，今後に繋がるご縁をいただくことができました。この実り多い時間を一人でも多くの人の健康作りに役立つことが出来るよう，精一杯で取り組みます。先生方，皆さま，本当にありがとうございました。（金村　祐美子）

◆ 今回，6 年ぶりに参加しました。これまでにお世話になった先生方，過去に一緒にグループワークをされた方々にお会いできたことが本当に嬉しかったです。講義の内容も分かりやすく，新しい情報や技術を知ることができ，参加して良かったと思えるセミナーでした。グループワークはやっぱり大変で，毎回ぎりぎりとなってしまいましたが，議論を重ねる中で意見を整理すること，まとめることの大変さや大事さを実感するとともに，研究をする上ではグループ内を統括し，マネジメントする人も重要であることを学びました。充実した 3 日間をありがとうございました。引き続き宜しくお願い致します。

（河原　賢二）

◆ 大変お世話になりありがとうございました。初めての参加でしたが，おかげさまで，楽しく有意義な時間を過ごすことができました。ビギナーコースの先生方の御講義は，運動疫学のエッセンスを網羅的にわかりやすく説明くださり，これから研究を始める者には大変役立つ内容でした。1 つ 1 つ復習して，試行錯誤しながら身につけていきたいと思います。ありがとうございました。

（長坂　裕子）

【講師のコメント】

川上　諒子（早稲田大学スポーツ科学学術院）

2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催に向けて，ボランティア募集やチケット販売が着々と進められており，多くの国民が関心を寄せています。本グループには予め「東京オリンピック開催が国民のスポーツ実施率・関心度，健康に及ぼす影響に関する研究」という大枠の指定テーマが割り当てられており，グループワークの末，「東京オリンピック・パラリンピックにおいてボランティアとして参加した人のその後のストレス対処力を追跡する」というタイムリーな研究計画の立案にチャレンジしてくださいました。文部科学省は，スポーツ施策の方向性を示す「スポーツ基本計画」において，スポーツを「する人」だけでなく，「観る人」や「支える人」を含めたスポーツ参画人口の拡大を掲げています。スポーツを「する」ことの価値はもちろん，「観る」ことや「支える」ことの価値を示すエビデンスを発信していくことはとても重要だと思います。研究計画作成のための時間が限られていたこともあり，調査・追跡の方法や交絡因子の選定などもう少し内容を詰める必要がある部分も見受けられますが，オリンピックに限らず何らかのかたちでぜひ実践していただけたらと思います。中田先生の講義の中で，「True or Surrogate?」というお話がありました。アウトカムを決定する際には，可能であれば客観的で対象者にとって意味のある強固なアウトカムを設定していただいた方がより質の高い研究デザインに仕上がると思います。最後に，運動疫学セミナーにご参加いただき誠にありがとうございました。今回のセミナー参加が今後の皆様の研究活動に少しでもお役に立てたならセミナー委員一同とても嬉しく思います。